

侍ジャパンと経済学者

東洋学園大学現代経営学部 教授 木村 壮次

不況の中、元気と希望を与えてくれたのは、野球の国別世界一を決定する WBC での“侍ジャパン”の頑張りであった。決勝戦の舞台まで不振が続き、多くの日本人が不安な気持ちで見守っていたイチローが延長10回という土壇場で劇的なクリーンヒットを放って勝利したのだ。2連覇の偉業である。

実力 NO 1 といわれたキューバ、野球の本家アメリカ、そして決勝戦で宿敵韓国を破っての世界一であった。世界中に日本の存在を見せ付けてくれた。今回の世界一までの道のりは、有力選手の辞退のほか、監督の選出においても難航するなど厳しいスタートから始まった。そして予選から決勝戦まで、苦しみ、もがきぬいて勝ち取ったものであった。それだけに、子供からお年寄りまで、私たち日本人に大きな喜びと元気を与えてくれた。

原代表監督は、指導者として采配が危惧されたが、選ばれた選手、コーチがそれぞれの役割を十分に果たしての優勝であった。原監督は、これまでの“長嶋ジャパン、王ジャパン、星野ジャパン”と違って、チームを“侍ジャパン”と自分の名前を前面に出さないように宣言した。こうした心遣いが、選手達にも十分に届いたからこそこの世界一である。世の中では、“目立つように振舞え”という風潮が強いが、原監督は日本人の原点をみつめ“侍ジャパン”と命名したものと思う。そして“日本力”という言葉を使った。それは“気力と粘り”の2点だそうだ。決勝戦の韓国戦はこれを見せつけて勝てたという。イチローは何度も「日の丸に恥じないように」と“プライド”を口にした。武士道で重視していた矜持である。“プライド”、“自己犠牲”、“潔さ”、現代の日本人が忘れてかけていた精神である。

武士道の精神はもちろんアメリカ社会からは生まれにくい。アメリカは個人主義の国柄である。今回の金融危機の元凶となった経営者たちは、数百億のボーナスという多額の公的資金（税金）を支払わなければ、「従業員をつなぎとめられず再建できない」という。日本ではとても考えられない

風潮である。これほどまでに違う国民性を知らずして“アメリカ的社会”を誉めそやし、“構造改革・規制緩和”に旗を振っていたのが経済学者や評論家であり、メディアであった。裁判員制度の導入もアメリカ型社会の真似でしかない。

アメリカ発の金融危機については世界中で「百年に一度の危機」というフレーズが盛んに使われている。このフレーズについては前回のコラムで“危機を大袈裟にしている”と述べたが、「資本主義の世界では百年に一度くらいの危機だから、誰の責任という問題ではない」という雰囲気も漂っている。アメリカ流のやり方をひたすら推奨してきた人たちも、誰も悪くないというわけだ。

こうした風潮の中で、著名な経済学者である中谷巖氏は自著『資本主義はなぜ自壊したか』で、“これまではアメリカ一辺倒であったがその主張は誤りである”との懺悔をし“転向”を宣言した。この“転向”に対して“何をいまさら”という冷やかな態度をとる学者等もいる。しかし、反省もなく、なし崩し的に主張を変え、マスコミに取り入っている卑怯な学者や評論家に比べれば余ほどもましである。著書では、第二次世界大戦中に書かれたカール・ポラニーの『大転換』と、渡辺京二の『逝きし世の面影』が紹介されている。『大転換』は市場主義経済の危険性が、そして『逝きし世の面影』では幕末・明治期に来日した西欧の人々の手記による、“良き社会日本”が記述されている。中谷氏が早くに『大転換』を読んだり、伝統をもった日本社会の良さを知っていたならば誤りを犯さずにすんだであろう。原監督やイチローのようにスポーツや芸術部門等で活躍してきた一流の人たちは“日本の素晴らしさ”を認識し、海外で日本の良さを伝えようとして懸命に努力している。しかし、戦後のアメリカ流経済学に依存している経済学者たちは“日本の素晴らしさ”を気づかずに、市場原理主義に通じる“構造改革・規制緩和”を啓蒙し続けたのである。